

アイケルバーガーと占領軍の余暇・娯楽政策

阿 部 純一郎

1. はじめに——目的・分析対象

占領下日本には至るところに米軍専用の娯楽施設・保養施設が存在した。軍専用のゴルフ場やスキー場、クラブや劇場・映画館、さらには観光地に建つリゾートホテルまで、日本人客の立入りが禁止されたその空間は、米軍当局が隊員のレクリエーションのために、日本の運動施設・娯楽場・ホテルなどを接収して作り上げたものだった。その数は、1946年8月時点で運動施設が553、劇場・映画館139、休暇用ホテル29施設と相当な量にのぼった¹⁾。

本稿の目的は、日本占領軍の主力として全国の米軍部隊を指揮した米第八軍司令官ロバート・L・アイケルバーガー（1886～1961年）の発言を中心に、占領期日本において米兵を対象とした余暇・娯楽政策を促した軍上層部の問題意識を探る。

本稿で扱う主な資料は、①デューク大学パーキンス図書館所蔵のアイケルバーガー文書をアダム・マシュー社がマイクロフィルム化した資料集 *The Papers of General Robert L Eichelberger from the William R Perkins Library, Duke University*、②アイケルバーガーの日記（1945.7.23-1949.1.1）が収録された資料集 *The Occupation of Japan, Part 3: Reform, Recovery and Peace 1945-1952*（編者は五百旗頭真）、③米国国立公文書館（NARA）所蔵の *World War II Operations Reports, 1940-1948* に所収された第八軍の占領経過報告・事業報告、④極東地域の米軍関係者向けに発行された日刊紙『星条旗新聞（*Pacific Stars and Stripes*）』（以下、S&Sと

表記）の関連記事である。

2. 占領の倦怠と保養地計画

2-1. 日本占領における第八軍の役割

米軍を主力とする連合国軍の日本「本土」占領は、1945年8月28日先遣隊の厚木進駐によって開始され、以後1952年4月28日講和条約発効に至るまで6年8カ月の長期にわたった。進駐当初、占領軍は米太平洋陸軍（USAFAPAC）管下の第八軍・第六軍を中心に、米陸軍太平洋空軍（第五空軍）および在日海軍部隊（第三艦隊・第五艦隊）で構成されており、1946年2月には英連邦軍（中国・四国地方に駐留）も補助部隊として加わった。このうち第八軍は主に東日本、第六軍は西日本に部隊を展開したが、1945年末に第六軍が動員解除されると、以後、第八軍が日本全国の米軍部隊を指揮することになる。この第八軍司令官を務めたのがアイケルバーガー（1944年9月就任、1948年9月離任・帰国、1949年1月退役）だった。

アイケルバーガーは第八軍司令官の任務をいかに捉えていたか。まず彼は、第八軍の役割は、対日占領政策を立案することではなく、連合国軍最高司令官総司令部（以下、GHQ/SCAP）が立案した政策・指令を実行に移すことだと認識していた²⁾。よく知られているように、日本本土の占領方式は、占領国が被占領国の行政・司法・立法のポストを掌握し、国民に直接命令を下す「直接統治方式」をとらず、GHQ/SCAPから日本政府に命令が発せられ、その命令を日本政府が責任をもって実行する「間接統治方式」が採用された。

また、日本政府が命令を忠実に実行しているかを監視する機関として、各地方には軍政部（Military Government）が設置され、米軍部隊の中から民事行政に適性のあるスタッフが任務にあたった（竹前1983:54-59）。

また、アイケルバーガーは軍司令官として、所属隊員の士気を維持し、安全かつ快適な生活を実現し、占領業務を不満なく続けさせることに意を尽くした。「私が軍司令官の立場から一番関心をもっているのは、軍の能率（an efficient force）を維持することであり、この目的を達成するために、我が部隊の兵士の士気、健康、快適性（morale, health, and comfort）に多大な関心を払っている³⁾。こうした問題関心のもとで、兵士の士気を高めるために意欲的に取り組んだのが、米軍専用の娯楽・保養施設の整備だった。

娯楽・保養施設の充実が重視されたのは、アイケルバーガーが、日本占領に参加した兵士は戦時中から休息・慰安が不足してきた、と考えていたからである。「我が兵士の立場からすると、VJ day（対日戦勝記念日）よりも先にVE day（ヨーロッパ戦勝記念日）が訪れたことがおそらく不運だったのだ、と私は常々思ってきた⁴⁾。彼によれば、ヨーロッパ戦線の米軍部隊は、ノルマンディー上陸作戦（1944年6月）後にアメリカ本土から派遣された部隊が大多数で、ドイツ降伏による終戦（1945年5月8日）までの期間は比較的短かった。これに対して、占領初期に日本に駐留した兵士たちは、真珠湾攻撃（1941年12月）から太平洋戦線で戦ってきた者が多く、彼らはヨーロッパの兵士が先に戦争を終えて本国に帰還していることに苛立ち、嫌悪していたという（アイケルバーガーも1942年夏から帰国できておらず、一時帰国が許されたのはようやく1945年12月のことだった）。アメリカ本国には「良い仕事やかわいい女性」が待っているのに、太平洋のニューギニアには「強面で夫持ちの現地女性」しかいなかった、とアイケルバーガーは露骨に述べている

（つい口を滑らしたのか、原文では“cannibalistic women”の文字が消され、“native women”と修正されている）。「そこにはロマンスもなければ、VD[性病]もなかった。美人もいなければ、ロマンスもなく、休息地もなかった」。さらに終戦後も、進駐当初は日本の「かわいい女性」は征服者を怖れて街に出てこなかったため、兵士は「日本人に情熱を爆発させることもできなかった」と続ける。そして、このような状況が兵士を早期除隊・本国帰還を求める運動（“I wanna go home” movement⁵⁾）に向かわせたのだと主張する。

太平洋戦線および占領下日本での米兵の性暴力や性病問題を扱った先行研究を踏まえれば、米兵の禁欲性を示唆するアイケルバーガーの説明が不都合な事実を覆い隠していることは疑いない⁶⁾。ただし本節で注目したいのは、戦後米軍の海外駐留先で噴出した兵士たちの不満を、軍隊組織そのものに向けられた批判とは捉えず、あくまで駐留期間の長さや、駐屯先における女性・娯楽の不足に帰責するアイケルバーガーの姿勢だ。これが、兵士に十分な休息・慰安を与えれば問題は解決するという発想につながるのである。アイケルバーガーはアメリカ国民に対して、終戦後も占領軍の存在を忘れずに、遠く離れた海外で困難な業務に従事している兵士の「孤独（loneliness）」を解消する手助けをしてほしいと要望している。その方法の1つは本国から届く手紙であり、さらに映画や慰問公演、遊び道具などの娯楽の提供も「自分たちが忘れられた存在でないことを確認させるに役立つ⁷⁾」。アイケルバーガーにとって娯楽の提供は、兵士が海外駐留の孤独を紛らわすための手段であると同時に、彼らが本国に見捨てられていないことを示す証拠としても重要なものだった。

2-2. 米軍保養地計画の推進

ただし、本国から届けられる映画や慰問公演などは、占領期に米兵が楽しんだ娯楽のほんの一部にすぎない。むしろ娯楽の大部分は日本政府への

命令を通じて現地調達され、それにかかる費用(施設利用料・工事費・人件費・物品費など)はすべて日本の国家予算から支払われていた。GHQ/SCAPが日本政府に占領軍への娯楽提供を正式に命じたのは、1945年10月2日の指令(SCAPIN-90)が最初である。これは、占領軍が必要とする物資と役務(サービス)の範囲を具体的に予告した文書であり、そこには要求予定のサービスとして、「保養地、リゾートホテル、運動施設」「観光案内」「特別な娯楽(音楽、芝居、相撲等)」と記されている。また、この指令翌日には第八軍スペシャル・サービス局から、風光明媚な日本の観光地を整備して占領軍兵士が娯楽やスポーツを楽しめる保養地(rest camps)を作る計画が発表された(S&S: 1945.10.4)。

日本の観光地を拠点とする米軍保養地の建設は、進駐直後から着々と準備が進められていた。第八軍の報告書によれば、1945年9月にアイケルバーガーは第八軍スペシャル・サービス局に対して米兵向けの休暇用ホテル設置を指示し、これを受けて局内に「ホテル課(Hotel Division)」が新設され、日本全国で受入可能なホテルの調査が行われたという⁸⁾。その後、1945年10月末には関東地方の3つのホテル(鎌倉海浜ホテル、逗子なぎさホテル、日光金谷ホテル)が最初の休養ホテルとして米兵の受入を開始し(収容人員は計210名)、その数は1945年12月末に8施設(600名)、1946年10月時点で28施設(2500名)まで増加した⁹⁾。図表1は、1948年4月時点の計30ヵ所の休養ホテルである。

ホテルの立地は関東地方から近畿地方までの一帯と九州地方に偏っており、日光・箱根・軽井沢など、戦前から外国人に人気の観光地が多かった。東京・横浜・名古屋・大阪・京都・神戸など、都市部で人口も多く、米軍の重要な司令部が置かれたエリアは避けられており、駐屯地から少し離れた景勝地・行楽地が選ばれている。なおホテル課は、休養ホテルの収容人員を占領軍兵士全体の

2.5%(後に3%)とする目標を掲げていた¹⁰⁾。占領軍兵力数を「46年には約20万人、47年12万、48年10万2000人」(竹前1983:60)と仮定した場合、1948年の収容人員は3%目標で3060名となる。

休養ホテルの運営形態は、米軍から派遣された少数の監督官のもとで既存の日本人経営者および従業員が運営を続ける「請負制」が基本だった(宿舎として接収されたホテルの一部では軍直営もあった)。第八軍の報告書によれば、全体を統括する将校にはホテル、クラブ、娯楽場運営の経験者が選ばれ、その他に食堂を管理する炊事係、スポーツやレクリエーションの指導員、ホテル内の食品衛生や健康管理に責任をもつ医療技術者、自動車運転手・整備士などが派遣された。また、ホテルにはアメリカ赤十字社から派遣されたレクリエーション指導員が常駐し、米軍側の指導員と協力しつつ、ホテルで様々なイベントを企画したり、観光ツアーを催行した¹¹⁾。アイケルバーガーは、休養ホテルを請負制で運営したメリットとして、米軍側は少数の監督官を配置し、日本側で準備が難しい物資(食料、石油、自動車など)だけを供給すればよかったことを挙げる。それにより大幅に人員が節約でき、日本人と直接交渉する場合に起こりうる摩擦も避けることができたという¹²⁾。

また休養ホテルの開設と併せて、アイケルバーガーは米軍内部に、通常の休暇日とは区別された特別休暇(保養地休暇)の仕組みを導入した。この休暇は年1回6日間が原則で、兵士には軍が管理した休養ホテルで食事・宿泊を無料で楽しむ機会が与えられた。アイケルバーガーは第八軍司令部から全部隊に送付された「スペシャルサービスホテルでの休暇」と題する文書(1947年2月12日付)のなかで、この特別休暇の意味を説明している。彼によれば、保養地休暇は、戦時中、戦闘地域で軍人の「休養と回復(rest and recuperation)」のために導入された一時休暇の流れをくむものだった。この一時休暇の目的は、地位や階級に関わりなくすべての軍人に休息とリハ

図表1. 米軍の休養ホテル（1948年4月）

所在地		施設名	休養ホテル開業日※1	客室数		収容人員
				洋室	和室	
栃木県	日光町	日光金谷ホテル	1945年10月30日	82		150
	日光町（中禅寺湖畔）	日光観光ホテル	1946年4月9日	22	20	100
	鬼怒川温泉	鬼怒川温泉ホテル	1946年8月6日	39		60
	川治温泉	柏屋旅館	不明	不明	不明	不明
新潟県	妙高市	赤倉帝国ホテル	1945年12月11日	32	14	96
長野県	下高井郡	上林ホテル	1946年5月28日	7	48	313
	下高井郡	志賀高原ホテル	1945年12月11日	35	16	103
	軽井沢町	軽井沢万平ホテル	1946年7月2日	65	15	160
	軽井沢町	軽井沢ニューグランド・ロッジ	（1945年10月接収）※2	不明	不明	不明
神奈川県	横須賀市（逗子）	逗子なぎさホテル	1945年10月30日	23		33
	足柄下郡（宮ノ下）	富士屋ホテル	1945年11月6日	141		251
	足柄下郡（強羅）	強羅ホテル	1946年5月28日	62	2	150
	足柄下郡（仙石原）	仙石原ゴルフクラブハウス	（1945年10月20日接収）	25		48
静岡県	熱海市	熱海ホテル	1945年11月6日	30	32	153
	熱海市	樋口旅館	（〇〇年10月10日接収）	30	60	不明
	熱海市	熱海体育ホテル	（1948年3月1日接収）	10		41
	熱海市	野村別邸（※野村徳七の熱海別邸）	不明	不明	不明	不明
	沼津市	静浦ホテル	1946年2月12日	31		66
山梨県	南都留郡（河口湖畔）	富士ビューホテル	1945年11月20日	53	7	188
	南都留郡	山中湖ホテル	1946年5月28日	20	15	111
愛知県	蒲郡町	蒲郡ホテル	1946年1月29日	29		50
	蒲郡町	竹島館	1946年1月29日		62	200
石川県	石川郡湯涌谷村	白雲楼ホテル	1946年7月23日	19	38	247
滋賀県	大津市	琵琶湖ホテル	1946年1月29日	54		125
奈良県	奈良市	奈良ホテル	1946年1月29日	52		104
佐賀県	唐津市	唐津シーサイド・ホテル	1946年7月30日	32	3	85
長崎県	南高来郡	有明ホテル	1946年6月4日	28	11	72
	南高来郡	雲仙観光ホテル	1946年4月9日	64		128
	南高来郡	九州ホテル	1946年6月25日	47		90
熊本県	阿蘇郡	阿蘇観光ホテル	1946年4月23日	46	3	107
				1078	346	3231

出典：「進駐軍其他外国人ホテル利用状況一覧表」（運輸省観光課調、1948年4月6日）『続日本ホテル略史』pp.155-156.

※1：開業日はHq/Eighth Army, Office of the Special Service Officer, *Historical Record of Special Service in Japan, Nov.45-Oct.46*.

※2：接収年月は『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』より。

ビリの機会を与え、部隊の「戦闘効率と士気 (fighting efficiency and morale)」を高いレベルで維持することにあった。つまり、人間には我慢の限界があることを認めたうえで、個々の兵士に過酷な任務から解放される期間を与え、効率的な戦闘員を維持することが狙いであり、兵士個人の快楽を満たすためのものではないと説明されている。このように保養地休暇の軍事的意義を述べたうえで、最後にアイケルバーガーは部隊指揮官に

対して、隊員の休暇取得を促し、個々の兵士の幸福感和士気を高め、各部隊の能率や精神を高めてほしい、と訴えている¹³⁾。

上の説明にあるように、保養地休暇は、兵士に軍隊生活から離れた場所で息抜きを与えることを目的としていた。軍の休養ホテルが駐屯地から離れて置かれていた理由もこの文脈で理解できる。また第八軍の報告書は、兵士に「最大限の快適さと息抜き」を与えるため、ホテル内の取り決めは

「軍の規則からの最大限の自由を認めるように設計された」と指摘する。滞在中にTシャツ姿で食事をとることが許されたのは勿論、ホテル周辺では様々なスポーツ（スキー、スケート、テニス、ボート、水泳、ゴルフ、バレー、バスケット、釣りなど）を楽しむことができ、近場の観光地に出かけるバスツアー、屋内ではゲーム大会、映画上映、ダンスパーティも主催された。さらに報告書は、休暇中の兵士が接触する将校はホテルを統括する数名の監督官だけであり、彼らは将校の前で感じてしまう遠慮からも解放されたと指摘する¹⁴⁾。通常、休養ホテルは将校用（Officer）と下士官・兵用（Enlisted）に分けられ、階級により利用可能なホテルが区別されていたが、軍はこのような棲み分けを、兵士の居心地を高めるための工夫としても位置付けていた¹⁵⁾。

さらに休養ホテルでの休暇・娯楽体験は、海外駐留の特権の1つとして、軍の広報手段にも利用された。米軍は戦前から海外駐留経験を（国が費用を負担する）安上がりの海外旅行のように宣伝し、兵員募集に利用してきたが（LOO 2019:180-181）、この手法は日本占領にも引き継がれた。「第八軍に入って日本を観光しよう」と謳った星条旗新聞の記事は、その分かりやすい例である（図表2）。記事では、「日本に駐留している間、すべての兵士にできるだけ多くの日本を観光する機会を

与えたい」というアイケルバーガーの言葉が紹介され、現在第八軍が実施している「リベラルな」余暇政策として、占領軍兵士に対する鉄道運賃の無料化（東京から30マイル以内は乗車券不要、遠出する場合は3日間有効の乗車券配布）や、リゾート地の保養施設で過ごす特別休暇などが説明されている（S&S: 1945.11.3）。

3. 家族呼び寄せと保養地休暇の対立

3-1. 休養ホテルを占拠する米軍家族

前節で見たように、アイケルバーガーは兵士に特別休暇を与え、リゾートホテルでの宿泊体験を無償で提供することで、海外駐留の孤独を埋め合わせ、軍隊組織への不平・不満を解消しようとした。だが、すべての兵士に日本での観光体験を提供するというアイケルバーガーの理想の実現は、様々な理由で制限された。第八軍の報告書は、その理由の1つとして、部隊指揮官が（野外訓練中または兵力数が定員を下回る場合に）所属兵士の離脱を嫌がるといった軍組織の問題を挙げているが、もう1つの大きな理由は、1946年6月頃から本格化した米軍家族の日本移住である。この家族呼び寄せは、休養ホテル設置と同じく、兵士の孤独感の解消、士気の向上のために採用された施策だが、両者の施策は対立する場合もあった。その原因は、米軍家族の移住数に住宅建設のペースが追いつかなかったことにある。特に兵士が集中する都市部では家族住宅が不足し、住む場所に困った妻子たちは臨時の仮住まいとして休養ホテルに宿泊した。こうして米軍家族に占拠された休養ホテルの部屋総数は、1946年夏季に少なくとも50部屋、多いときには300部屋に及んだという¹⁶⁾。

図表3は、1946年9月～1947年12月の期間にホテル課が管理する29カ所の休養ホテルに一時宿泊した米軍家族数である。当時は休養ホテルのベッド数の半分以上が米兵の休暇用に割り当てられて

Join The Eighth Army To See Japan And Bon Voyage Soldier

YOKOHAMA—GIs who "joined the Army to see the world" as well as those who were drafted and still saw the world now have a good opportunity to see quite a bit of Japan, considering the liberal free time and transportation policy set up by Eighth Army.

"I want every soldier given the opportunity to see as much of Japan as possible while he is stationed here," announced Gen. Robert L. Eichelberger, commanding general, Eighth Army.

Commanding officers of all units have been instructed that soldiers may take off on their own or on organized tours, using Army or Japanese government transportation.

According to an Eighth Army directive, free transportation on Japanese railroads and streetcars is authorized for all Allied forces any-

where on the islands. Tickets are not required on streetcars, subways, or interurban trains within a radius of 30 miles of Tokyo.

Individuals or organized "nighttime" groups on three-day passes who want to go as far as they can and get back within that time will be issued tickets to points indicated on passes by railroad transportation officers. ETCs are located in the larger stations of the Japanese railroad system. These tickets are not collected on the train, but are supposed to be carried on the trip by the soldier.

Besides the three-day pass, the directive has authorized the Class "A" pass whereby military personnel can be absent from their units during off-duty hours.

Recreational temporary duty which is not to exceed seven days in any other form of free time that is to be

provided in connection with the rest camp program set up in the heavy districts. Under the temporary duty arrangement no time is counted against accumulated furloughs.

In so much as sleeper cars are not yet available for general travel on the Japanese railroads, individuals and groups are urged to make plans for sleeping before tours are undertaken. The same goes for sleeping in so much as most Japanese eating and drinking places are off limits.

Eighth Army officials have pointed out it is the desire to conserve Japanese food for civilian consumption without unduly limiting entertainment facilities for military personnel, so that civilian food supplies will not be used to serve meals to groups on tour.

図表2：観光旅行としての海外駐留

出典：S&S（1945.11.3）より抜粋。

図表3：休養ホテルに宿泊した米軍家族数

	家族数	宿泊者数
1946年9月	38	114
1946年10月	34	103
1946年11月	27	81
1946年12月	41	123
1947年1月	68	204
1947年2月	104	312
1947年3月	174	490
1947年4月	309	929
1947年5月	336	1,007
1947年6月	453	1,359
1947年7月	171	513
1947年8月	167	501
1947年9月	186	564
1947年10月	312	935
1947年11月	425	1,276
1947年12月	363	1,090
計	3,208	9,601

出 典：Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan*, vol.3(Sep 1946 – Dec 1947), p.155.

いたが、その枠を満たすことは難しかった。例えば1947年11月中に休養ホテルを利用した米軍家族の宿泊日数（bed-days）は合計3万6978日だったが、これに対して米兵の宿泊日数は割当分の2万340日のうち1万488日で、半数程度しか使われていなかった。米兵の宿泊日数が伸び悩んだ理由として、第八軍の報告書は次の2点を指摘する。第1に、米軍家族の来訪数が不確定であったためホテル側は短期の予約しか受け付けず、米兵は休暇プランを事前に立てることが難しかったこと、第2に、人口も多く便利な場所にあるホテルの部屋は米軍家族が占拠していたこと、である¹⁷⁾。その結果、第八軍は米兵の宿泊場所を確保するため、従来は健康被害などを怖れて「立入禁止（off limits）」に指定してきた日本人経営の一般の旅館・ホテルの利用も次第に認めざるを得なくなる（阿部2017:4-6）。

以上のように、米軍家族の大量移住は、占領軍兵士の「士気、健康、快適性」のために実施された様々な施策に衝突を引き起こすものであった。

以下では、家族呼び寄せと休養ホテル運営に関するアイケルバーガーの立場を整理し、彼が占領軍の士気や能率を高めるために何を重要視していたかを明らかにしたい。

3-2. 軍人の家庭化／無力化

元々、占領軍の家族呼び寄せ計画は、1945年10月のアイケルバーガーとマッカーサーとの会談がきっかけだった。当時、マッカーサーはすでに妻子を日本に呼び寄せ、東京の米国大使館で暮らしていたが、アイケルバーガーも含めた他の将校たちが家族を呼ぶことには慎重だった。一部の将校だけにそれを認めれば多くの非難を受けることになると考えていたからだ。そこでアイケルバーガーは、将校にかぎらず下士官・兵にも開かれた政策として、3年間日本で任務に就く者に家族を呼び寄せる権利を与えてはどうかと提案し、マッカーサーはこれに賛意を示した（アイケルバーガー日記、1945年10月1日）。その後、この問題は具体的な検討が進められ、1946年2月には陸軍省から、日本に駐留するすべての兵士に家族呼び寄せを認め、特に2年間の勤務に同意した者に優先権を与えるとの指令が出された（アイケルバーガー日記、1946年2月28日）。

ただしアイケルバーガー本人は、家族呼び寄せの権利をあらゆる兵士に拡大することには懐疑的だったことに注意したい。例えば1945年11月中旬にアイケルバーガーが軍上層部で家族問題の検討が進んでいると公表した際、彼はそこで、家族呼び寄せの権利は「将校および上位三等級以内の下士官兵」に与えられるべきであり、海外駐留生活が長い兵士に与えられるのが「公平な解決策」だと述べている（S&S日本朝鮮版:1945.11.15）。また彼は、この問題は「宿泊施設次第」としたうえで、「施設が利用可能になれば、将校および上位三等級以内の下士官兵の妻が占領地域に来ることを認めるべきであり、それは夫の海外駐留期間や、彼がどれくらい長く海外に駐留する意志があ

るかに基づいて決めるべきだ」と主張している¹⁸⁾。先行研究でも、アイケルバーガーが家族呼び寄せの権利を高級将校のみに限定していたことが指摘されている。その第1の理由は、当時の下士官・兵には若い未婚者が多く、妻子との合流を必ずしも強く望んでいなかったからであり¹⁹⁾、第2に、家族との平穏な暮らしが兵士を軟弱にし、戦闘への備えが失われると恐れていたからである。一方、陸軍省のような政策推進派は、家族との再会が急落した兵士の道徳と士気を回復させてくれることを期待した（Carruthers 2016 = 2019:381-386）。占領地域で家族と暮らすこと自体、第二次世界大戦後に始まった新しい現象であり、その評価は米軍内部でも定まっていなかった。

米軍家族の急増に対する危機感は、国務省のジョージ・ケナンとの会談（アイケルバーガー日記、1948年3月10日）にも確認できる。会談に同席したレスター将軍のメモ書きによれば、この会談でケナンは、対日占領政策の重心が日本の〈非軍事化〉から〈経済的自立〉に変化している点を踏まえて、次のように指摘したという。まず、日本経済に多大な負担をかけている占領経費（年間500億円）の削減に全力で取り組む必要があり、米軍施設の建設は打ち切り、軍関係者が豪華なホテルや別荘に住むこともやめるべきである。また、人口が集中している都市部に制服姿の軍人がいるのは非常に目立つため、首都圏から離れたところに部隊を移転し、接収施設の返還も検討すべきである。さらにケナンは、日本の非武装化が完了し、在日米軍のなかに司令部や補給関係の非軍事業務に携わる軍人が増えていることにも安全保障面での不安を投げかけた。以上の発言を受けてアイケルバーガーは、占領経費の削減に向けてまず取りかかるべきは、家族呼び寄せを停止し、米軍家族住宅をこれ以上建設しないことだと主張した。「私だったら、まず家族がここに来ることを止めさせ、それから家族が現在いる場所に落ち着かせるだろうと語った。家族用宿舎をさらに建設することは

占領軍にとっては、ほとんど意味がない」（アイケルバーガー日記、1948年3月10日）²⁰⁾。

この数日後のマッカーサーとの会談でも、アイケルバーガーは「あまりにも多くの軍人家族が来すぎることに問題」に言及した。これに対してマッカーサーは、「家族がいかに軍人の士気を高揚するか」を語り、「軍人家族はアメリカに戻るよりも、ここにいた方が安全」と主張したという。この点について日記には、軍人家族に要する費用が日本経済の負担になっていることや、現在の在日米軍には既婚者が多く、「万一の場合、あてにできる軍人はほとんどいないことになり、きわめて不適切になっている」との心情が記されている（アイケルバーガー日記、1948年3月13日）。さらに数日後の日記には、第八軍の兵力数は現在4万人と少なく、その半分は補給業務に携わり実戦能力がほとんどないこと²¹⁾、残りの2万人も占領業務やMP警護などに従事している者たちで、8千万人の人口を有する日本を統治するには「余りにも弱小」と指摘されている。そのうえで彼は、在日朝鮮人が左翼運動にくみする危険性やロシアとの戦争の脅威を考えた場合、日本の軍事力・警察力の不足は深刻な問題であり、「私としては、日本へやってくる飛行機が、女子供を連れてくるのではなく、兵士を運んで来てほしいものだ。そして、こちらにいる女子供を乗せて帰ってもらいたいものである」と記している（アイケルバーガー日記、1948年3月17日）。以上のように、日本の経済的自立や再軍備が求められる中で、アイケルバーガーにとって家族呼び寄せは、占領経費の増大や占領軍兵力の弱体化を引き起こす要因と捉えられ、批判の対象となっていた。

3-3. 接収解除運動と休養ホテル擁護論

これに対して、軍の休養ホテルの運営については、日本経済へのマイナスの影響が指摘されながらも、アイケルバーガーは事業継続を擁護する立場をとった。この点について、彼の立場がよく表

れた資料として、「日本における休養ホテル制度の廃止」と題する覚書を取り上げたい²²⁾。その冒頭でアイケルバーガーは、軍の休養ホテルが日本人に返還されるという「噂」が最近頻繁に流れていると述べ、何らかの措置がなされる前に自分の見解を述べておくのが望ましいと考え、この覚書を作成したと説明している。

確かに、占領初期から休養ホテルの運営に関しては、米軍向けの娯楽・運動施設の建設・改修命令が資材・資金不足にあえぐ日本経済の負担になるとして、日本側から何度も改善要請がなされていた。そして、1947年頃からはGHQ/SCAPや第八軍内部でも行き過ぎた調達要求を取締り、膨張する占領経費を節減する方向へ舵が切られていく。また、1947年頃から日本でも外国人旅行者に対する入国制限が段階的に緩和されると、インバウンド観光の復活に期待する日本の観光業界は接収ホテルの返還を強く求めるようになる。これを受けてGHQ/SCAP内部でも外国人に人気の観光地を中心に、接収解除に向けた調整が具体的に進められた(阿部2018:10-13)。アイケルバーガーのいう「噂」は、このような日米双方の動きを指していたと考えられる。

休養ホテル廃止論に反対してアイケルバーガーは、それが兵士の士気(morale)を高めると同時に、軍の広報宣伝(publicity)の装置としても優れていることを強調する。彼によれば、休養ホテルは現在、日本での休暇を願う兵士が満足して利用できる唯一の場所であり、普通の兵士が快適な環境で「日本観光(see Japan)」できる唯一の現実的な機会になっているという。またこの制度は、占領初期に世界中で鳴り響いていた抗議活動(2-1で言及した海外駐留兵士の帰国請願運動を指すと思われる)を鎮めるうえで大きな役割を果たし、いまでは日本に駐在する特権の1つとして広く宣伝されていると指摘する。

このように休養ホテルが現在まで果たしてきた役割を評価する一方、アイケルバーガーは、米兵

が休養ホテル以外の宿泊施設を利用するという代案をことごとく退ける。例えば軍の駐屯地の中には、北海道のように気候の影響でレクリエーションの機会が制限された場所もあるし、狭い宿舎で、娯楽も乏しく、プライバシーが守られていない場所も多くある。これに対して休養ホテルであれば、兵士は軍の厳しい規律から離れて、十分なプライバシーと自由行動が認められた環境でくつろぎ、遊び、「典型的なアメリカ人の観光本能(sightseeing instincts)を満たす」ことができると主張する。さらに、休養ホテルの代わりに日本人が経営する一般のホテルを利用するという選択肢も、健康被害への不安から強く否定される。「責任ある司令官、軍医、従軍牧師であれば、赤痢、買春、不道德、放蕩、性病が蔓延し、間違いなく伝染病の温床になっているであろう日本のホテルの開放に同意したりはしないはずだ」。こうした発言には、日本人経営のホテルに対する強い忌避感情がみられると同時に、問題の原因を米兵側ではなくホテル側に帰責する姿勢が顕著に現れている。

また、返還推進派が指摘する休養ホテルの運営費用の問題についても、アイケルバーガーは、軍が要求するホテルの設備は行き過ぎたものではないし、すでに施設の建設・改修費用は支払われているため、将来的な負担は従業員の人件費などホテルの維持・管理の費用に限られると主張する。さらに覚書では、米兵から施設利用料を徴収し、日本政府への返済金にあてるという案にも触れているが、アイケルバーガーは、現在日本ではあらゆる物資・人件費が高騰しており、このような状況で高額な利用料を支払える兵士はほとんどいないと実現性を否定する。

最後にアイケルバーガーは、仮に休養ホテルを返還したところで今の日本人はそれを有効活用できないとも指摘する。なぜなら、休養ホテルは人口が多い商業地区から離れた場所にあり、その用途も商用でなく観光目的に限られてくるが、ごく

一部の富裕層を除けば高額なホテル代を支払える日本人客はいないし、日本の輸送手段、食料、燃料その他の物資不足を考えれば、大方のホテルは日本人だけでは満足ゆく経営をできないはずだからである。

以上のように述べるアイケルバーガーの狙いは、休養ホテルは米軍が利用または運営しているからこそ経営が成り立つと主張することにある。しかし彼の説明は、日本の観光業界がホテル返還を求めた際、彼らが見込んでいたのは、入国制限の緩和とともに増加しつつある外国人旅行者の利用だったことを見落としている。また2-2で論じたように、休養ホテルの運営形態は基本的に請負制で、ホテルを実質的に運営していたのは日本人の経営者と従業員であることや、施設利用料や人件費も含めて米兵の娯楽提供にかかる費用を支払っていたのは日本政府であることにも触れていない。このような事実を無視したところに、休養ホテルの経営は米軍が支えているという主張が成立するのである。

4. 結語

本稿では、米第八軍司令官アイケルバーガーの発言を中心に、占領軍の余暇・娯楽政策の背景にある問題意識と、彼が余暇・娯楽政策の意義を他の占領政策との関係のなかでどのように評価していたかを分析した。分析の結果、以下の3つの知見が得られた。

第1は、占領軍の余暇・娯楽政策は、アイケルバーガー自身も参戦した太平洋戦争の経験との連続性のなかで理解される必要があること。軍専用のリゾートホテルでの保養地休暇の計画は、戦時中の「休養と回復」を目的とする一時休暇制度から着想を得たものであり、こうした軍隊からの解放・息抜きが強く求められたのは、初期の占領軍兵士が太平洋戦線で長期の駐留を強いられた人々

であり、ヨーロッパ戦線の兵士に比べて慰安が不足していると考えられたからだだった。ちなみに、1950年に朝鮮戦争が勃発すると、日本に存在した米軍の休養ホテルは、朝鮮に出兵した米兵が一時休暇を得て訪れる保養施設としても活用される。この戦時休暇もまた「R&R (Rest and Recuperation)」と呼ばれ、戦前／戦後を貫く連続性を考える上で興味深い。

第2に注目したいのは、家族呼び寄せに対するアイケルバーガーの距離感である。彼の言動が政策実現に寄与したことは確かだが、彼は米軍家族の移住を無条件で支持したわけではなかった。あくまで宿泊施設が確保できる場合にかぎり、上位階級の兵士を対象に、長期の海外勤務者や継続勤務希望者から優先的に、移住を認めるべきだと考えていたにすぎない。さらに東西冷戦の緊張が高まる中で、米軍家族の大量移住は、日本の経済発展を妨害し、在日米軍の弱体化をもたらす、アメリカの対日政策の阻害要因として批判されていく。在日米軍の家族同伴が常態化している現在からみれば、その歴史の最初期において、米軍司令官が行き過ぎた家族呼び寄せに危機感を表明していたことは興味深い。

その一方で、第3にアイケルバーガーは、占領初期から自ら率先して整備を進めてきた休養ホテルの継続を、様々な反論や他の選択肢を否定することで正当化し、頑なに守ろうとした。そこでの説明に共通するのは、米軍側の利益や運営実績を強調する一方で、日本側が支払ってきた費用や労力を軽視（あるいは無視）する姿勢だ。そしてこの姿勢は、軍の休養ホテルが占領終了とともに返還された後も、米軍基地内の娯楽施設（軍専用ゴルフ場など）の存続を正当化する際の論理として引き継がれることになる（阿部2023）。

本稿の分析により、戦時中から占領期、ポスト占領期から現在までを貫く、日本の米軍保養地の形成・発展史の筋道が明確になったといえる。

参考文献

〈一次資料〉

Diary of Robert L. Eichelberger (1945.7.23-1949.1.1) in *The Occupation of Japan, Part 3: Reform, Recovery and Peace 1945-1952*, Congressional Information Service, Inc. and Maruzen Co.(国立国会図書館憲政資料室所蔵), Section 3-E-1.

The Papers of General Robert L Eichelberger from the William R Perkins Library, Duke University, Adam Matthew Publication(国立国会図書館憲政資料室所蔵), Reel 33, Box.64.

World War II Operations Reports 1940-1948, Eighth Army (国立国会図書館憲政資料室所蔵).

読売新聞、「ロバート・L・アイケルバーガー中将記 東京への血みどろの道」(1949年12月1日～1950年2月8日、全60回連載)

〈二次資料〉

阿部純一郎(2017)『『オフリミッツ』の境界：衛生・観光・諜報』『椋山女学園大学文化情報学部紀要』第17巻、pp.1-14.

———(2018)「米軍保養地の形成と展開：占領期日本の休養ホテルを中心に」『椋山女学園大学研究論集：社会科学篇』第49号、pp.1-18.

———(2022)「退屈な占領：占領期日本の米軍保養地と越境する遊興空間」蘭信三・石原俊・一ノ瀬俊也・佐藤文香・西村明・野上元・福岡良明編『社会のなかの軍隊／軍隊という社会』岩波書店、pp.69-92.

———(2023)「ポスト占領期における米軍娯楽施設のポリティクス：米軍ゴルフ場に関する国会議事録の分析」『椋山女学園大学研究論集：社会科学篇』第54号、pp.75-93.

Carruthers, Susan L. (2016) *Good Occupation: American Soldiers and the Hazards of Peace*, Harvard University Press. (= 2019年、小滝陽(訳)『良い占領? : 第二次大戦後の日独で米兵は何をしたか』人文書院.)

羽田博昭(2014)「米軍基地をめぐる地域と社会」『相模原市史 現代テーマ編』相模原市.

林博史(2005)「アメリカ軍の性対策の歴史：1950年代まで」『女性・戦争・人権』学会学会誌編集委員会編『女性・戦争・人権』第7号、pp.94-118.

LOO, Tze M. (2019), "Paradise in a war zone" : The U.S. Military and Tourism in Okinawa, 1945-1972, *Japan Review* 33, pp.173-193.

大場修編(2021)『占領下日本の地方都市：接収された住宅・建築と都市空間』思文閣出版.

大嶽秀夫編(1991)『戦後日本防衛問題資料集第1巻：非軍事から再軍備へ』三一書房.

竹前栄治(1983)『GHQ』岩波新書.

運輸省観光部編(1949)『続日本ホテル略史』運輸省観光部.

World War II Operations Reports.

2) "Statements by Lt. General Eichelberger," p.1, in *The Papers of General Robert L Eichelberger*. 文書作成日は不明だが、発言内容から第六軍の動員解除(1945年12月末)以前と推察される。1949年に出版されたアイケルバーガーの回顧録「東京への血みどろの道 (*Our Bloody Jungle Road to Tokyo*)」(邦訳が1949年12月から1950年2月にかけて読売新聞に連載)でも、GHQ/SCAP、米陸軍省、極東委員会の「命令が実行に移されるのを監視するのが第八軍の役目」であり、「第八軍は日本における政策立案には全然関与しなかった」と述べている(読売新聞、第57話)。

3) "Statements by Lt. General Eichelberger," p.1, in *The Papers of General Robert L Eichelberger*.

4) "Our Soldiers in the Occupation," in *The Papers of General Robert L Eichelberger*. この文書は、アイケルバーガーが1948年2月21日・22日に発言した内容を口述筆記したものである。

5) 終戦後、日本を含む米軍の海外駐留先で発生した早期除隊・本国帰還を求める運動については、Carruthers(2016=2019: ch.6)、阿部(2022:72-78)を参照。

6) 林(2005)によると、「アジア太平洋地区では太平洋諸島での戦闘が続いていた時期は米兵の性病罹患率はきわめて低かったがフィリピンに米軍が入っていくと45年に入り急激に罹患率が上昇していった」。性病の蔓延について米軍高官は、現地では売春が容認されており、米軍にはそれを取締る権限がないと弁解し、問題の発生源は米軍側にあるとの指摘を黙殺した。「インドのシロン地区に駐留した米軍内での性病問題の会議(45年2月)の際に、元々この地域には性病は少なかったのに米軍が持ち込んだのであり、むしろ米軍が非難されるべきだと発言した大佐がいた。しかしこの意見はまったく無視されている。また太平洋の島のなかには米軍が淋病や梅毒を持ち込んだことを認めている報告もあるが(たとえば仏領ボラボラ島)、米軍が来たことが売春を拡大させ、あるいは性病を持ち込み拡大させたという視点はほとんど欠落していた。悪いのは悪徳の売春を容認・肯定している、あるいは淫らな性慣行のある現地社会であるというのが米軍の認識だった」。戦争終結はさらなる性病感染を招いた。「第八軍の罹患率はフィリピンにいたときは多くても30台にとどまっていたが、日本に来てから、9月33、10月54、11月86、12月153、46年1月179、2月197、3月250と急上昇した。概ね50以下に抑えるのが米軍の性病管理の原則であったがその危険水準をあっという間に超えてしまった。そのため12月5日には太平洋陸軍司令部(マッカーサー司令官)の軍医部から第六軍と第八軍に対して、米兵専用の売春宿で性病感染が繰り返されており、性病管理に問題があると警告が出された」。

7) "Statements by Lt. General Eichelberger," p.3, in *The Papers of General Robert L Eichelberger*.

8) Hq/Eighth Army, Office of the Special Service Officer, *Historical Record of Special Service in Japan, Nov.45-Oct.46*, in *World War II Operations Reports*.

9) 休養ホテルの施設数および収容人員は以下を参照。United States Eighth Army, *Eighth Army Experience in*

注

1) Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.2(Jan 1946 - Aug 1946)* in

- Japan, 1945-1947; Eighth Army, Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan(Aug 45 – Jan 46), p.177; Hq/Eighth Army, Office of the Special Service Officer, Historical Record of Special Service in Japan, Nov.45-Oct.46 in World War II Operations Reports.*
- 10) Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan(Aug 45 – Jan 46)*, p.177; Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.2(Jan 1946 – Aug 1946) in World War II Operations Reports.*
- 11) Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.2(Jan 1946 – Aug 1946) in World War II Operations Reports.* ただし、1947年半ばにアメリカ赤十字社は日本でのレクリエーション活動停止を発表。1948年3月までに休養ホテルに勤務していた赤十字社職員は米軍ホステス (army hostess) に交替した(多くの赤十字社職員はそのまま米軍ホステスとして勤務を継続した)。以上はEighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.3(Sep 1946 – Dec 1947) in World War II Operations Reports.*
- 12) “The Eighth Army in Japan,” pp.3-4, in *The Papers of General Robert L Eichelberger*. GHQ/SCAPの調達担当だったH.D.Brenn大佐によれば、民間の日本人労働力を活用し、米兵を炊事・掃除などの任務から解放することがGHQ/SCAPの狙いだった (S&S:1945.11.25)。日本人従業員に仕事を肩代わりさせたことは、米軍の余暇時間の増加にもつながった。
- 13) “Leaves of Absence at Special Service Hotels” (1947.2.12) in *The Papers of General Robert L Eichelberger*.
- 14) Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.2(Jan 1946 – Aug 1946) in World War II Operations Reports.*
- 15) アイケルバーガーは、将校が他の兵士より優れた専用の娯楽施設をもっていることへの批判にこたえて、進駐軍クラブを例に、ある程度分離は兵士にとって望ましいとの持論を展開している。彼によれば、将校やその妻を無理やり下士官・兵と同じクラブで楽しませようとしても、彼らは嫌がって家から出てこないだろうし、同じクラブにいれば下士官・兵の喜びや社会的名声が高まるわけでもない。それは、一般の市民生活において企業の社長や幹部が販売員や機械工と社会的に交わろうとしないのと同じことであって、「将校クラブは、似たような背景、年齢、関心をもつ人々と喜びを共有したいと願うアメリカ人の傾向の自然の発露 (normal manifestation) にすぎない」。こう述べたうえで彼は、すべての兵士を共通の社会環境の中に無理に押し込めるよりも、分離を求める人間の本性 (natural tendency) を認めた方が、全員が幸せになれるはずだと主張した (“Thoughts on Relationship between Officers and Enlisted Men,” p.7, in *The Papers of General Robert L Eichelberger*)。元々は階級による資源の不平等の問題が、人間がもつ集団本能の問題へと巧妙にすり替えられ、「自然の発露」「本性」として自然化される。
- 16) Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.2(Jan 1946 – Aug 1946) in World War II Operations Reports.*
- 17) Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.3(Sep 1946 – Dec 1947) in World War II Operations Reports.*
- 18) “Statements by Lt. General Eichelberger,” p.3, in *The Papers of General Robert L Eichelberger*.
- 19) アイケルバーガーは、日本に駐留するいくつかの部隊を視察するなかで、下士官・兵が妻の呼び寄せを望んでいないことを知った (例えばアイケルバーガー日記、1946年2月18日、2月20日など)。
- 20) 以下のアイケルバーガー日記は、大嶽編 (1991:246-251) より引用。
- 21) 羽田の整理によれば、第八軍の兵員数は1945年10月に23万人とほぼ最大に達していたが、除隊・復員が進んだ結果、45年末には13万9000人にまで減少した。その後、第六軍部隊の吸収や補充兵の到着により一時増加する時期もあったが長期的には減少傾向にあり、1948年5月には4万5000人と最低水準に落ち込んだ。また兵員数の減少とともに、第八軍の戦闘部隊の比率も過半数を切るほどにまで低下した (羽田2014:346-349)。
- 22) 以下の議論は、“Memorandum: Abandonment of Leave Hotel System in Japan,” in *The Papers of General Robert L Eichelberger*. 文書の目次には「Leave Hotel System - draft of letter to General Mueller」とあり、GHQ/SCAP参謀長を務めたPaul J. Mueller陸軍少将(1949年まで日本勤務)に宛てた文書だったことが分かる。

あべ・じゅんいちろう / 文化情報学部准教授
E-mail : jabe@sugiyama-u.ac.jp